

# 修士設計要旨

## 舟入川の計画とデザイン

2003年1月  
指導教員 重山陽一郎 助教授

社会システム工学コース 1055148  
辻本 一英

### 1. はじめに

舟入川の計画とデザインは、高知県香美郡土佐山田町にある山田堰から高知市葛島の国分川との合流地点へと流れる舟入川を景観的観点からデザインすることにより、川と人々が密着した河川環境をつくることを目的とする。また土佐山田町から高知市までの歩行者・自転車のための安全で快適な川沿いの交通ネットワークの確立もおこなった。

### 2. 舟入川の概要

舟入川は広大な地域への農業用水（灌漑用水）を確保することを第一の目的として整備されている。舟入川は藩政時代野中兼山により物部川に構築された農業用取水堰である。全長約12kmで土佐山田町の山田堰から南国市をぬけ、高知市の国分川へ合流後、浦戸湾へ流れる。

### 3. 問題点

現況の大きな問題点として、舟入川の存在感が薄いということが挙げられる。  
具体的には、

①川が活用されていない（川を活用した設計がなされていない）

舟入川は昔は人々の生活の一部であった。（炊事洗濯、子供の遊び場等）しかし現在灌漑用水という機能目的だけの川となっている。そのため人々との生活とは無関係にひっそりと流れている。

②環境への配慮がなされていない

灌漑用水という機能だけを目的としているので、舟入川はコンクリート三面張りで固められ、とても生物が生息する環境ではない。

以上の2点である。



### 4. 全体コンセプト

「風景や歴史を取り入れた魅力ある河川景観」というテーマのもと、以下の基本コンセプトに沿ってデザインをおこなう。

- ・川が存在をアピールする。
- ・人々に川に興味を持たせる。
- ・川に人々を集める。
- ・生態系に配慮したデザイン。
- ・川沿いの交通ネットワークの確立。

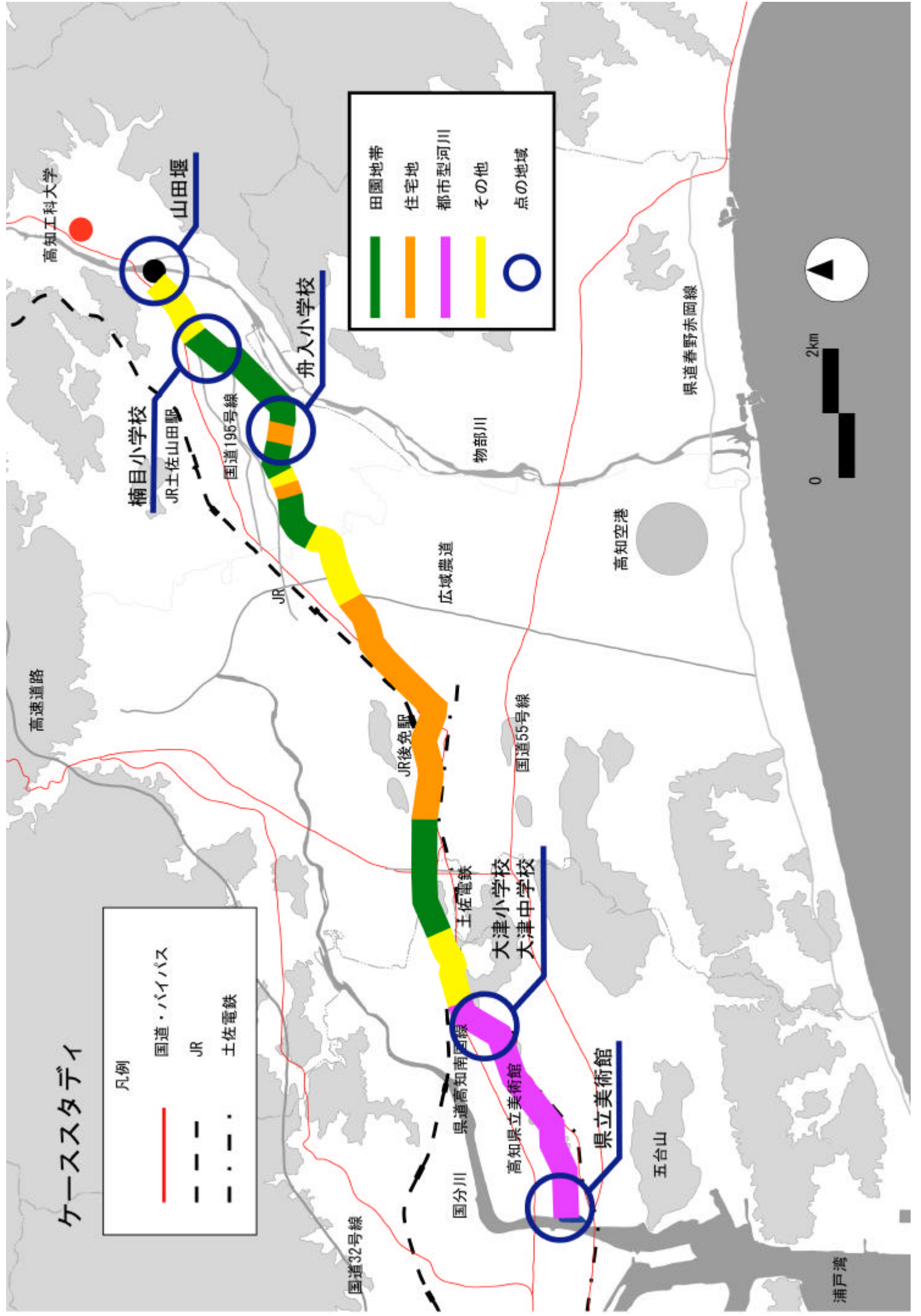
### 5. 各地域のデザイン

デザインをおこなうにあたり、まず舟入川全線を「点」と「線」に分類した。「点」とは学校などのランドマークとなる施設が川と交差する場所で、「線」とはそれら点と点をつなぐ川のことをいう。線のデザインは舟入川沿線の状況により、大きく3つのゾーンに分類し、基本となるデザインをおこなった。各地域のコンセプトとデザインの一部を以下に示す。

# ケーススタディ

凡例	
	国道・バイパス
	JR
	土佐電鉄

	田園地帯
	住宅地
	都市型河川
	その他
	点の地域



## 5-1. 線のデザイン

### 5-1-1. 田園地帯を流れるゾーン

- ・コンセプト

周囲の広々とした、落ち着いた雰囲気のある田園風景を活かし、緑と川の調和にコンセプトをおきデザインに取り組んだ。

- ・デザイン作品



### 5-1-2. 住宅地の中を流れるゾーン

- ・コンセプト

昔の表舞台としての川の風景を取り戻すため、川沿いに人々を集め、人と人とのコミュニケーションの空間ということにコンセプトをおきデザインに取り組んだ。

- ・デザイン作品



### 5-1-3. 都市型河川のゾーン

- ・コンセプト

人と川が結びつく開放的な河川空間。そして多彩な生物が生息する多自然型河川空間ということにコンセプトをおきデザインに取り組んだ。

- ・デザイン作品



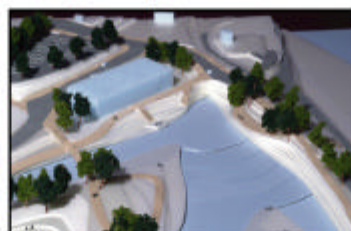
## 5-2. 点のデザイン

### 5-2-1. 山田堰

- ・コンセプト

舟入川の出発地点としての存在感を持たずということにコンセプトをおきデザインに取り組んだ。

- ・デザイン作品

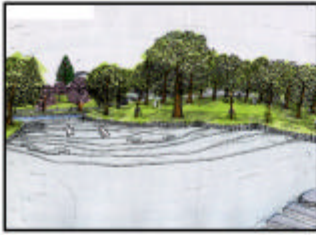


#### 5-2-2. 楠目小学校（山田分水）

- ・コンセプト

小学校等の子供が集まる施設が多く立地しているという周囲の条件を活かし、川で子供たちの遊ぶ親水公園という事にコンセプトをおき、デザインに取り組んだ。

- ・デザイン作品

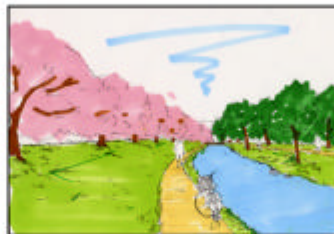


#### 5-2-3. 舟入小学校

- ・コンセプト

子供と川との関係を取り戻すため、自然の子供の遊び場ということにコンセプトをおき、デザインに取り組んだ。

- ・デザイン作品

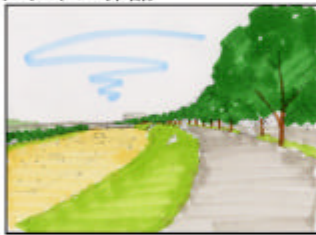


#### 5-2-4. 大津小学校・中学校

- ・コンセプト

川と学校との繋がりを深め、川を環境学習の場とするということにコンセプトをおきデザインに取り組んだ。

- ・デザイン作品



#### 5-2-5. 県立美術館

- ・コンセプト

舟入川の終点として川と美術館の関係を強めるということと、高知市内へ向かう新たな川沿いの交通路への架け橋にコンセプトをおきデザインに取り組んだ。

- ・デザイン作品



## 6. まとめ

この計画が現実におこなわれることになれば、人々は日常生活と舟入川との結びつきを再認識することができる。そして昔のように再び舟入川が人々の生活の一部に根付くことが期待できる。

しかし、それら快適な河川環境を末永く維持するためには、地域住民の川への愛着をかかすことはできない。また今回のデザインにおいて、多くの流域で用いた多自然型工法は維持管理が大変重要となる。それらの課題をクリアすることによって、真の地域に密着した川となる。そして舟入川の名が人々の心に残る「高知に舟入川あり」とうたわれるような美しい川となるだろう。

本計画とデザインが、現在全国的に起きている、河川を魅力的な場所に復活させようという、河川再生の動きの一端を担えれば幸いである。